

## 【教員寄稿】

### 「上智ポル語」の宿命と使命

拝野寿美子

皆さん、こんにちは。2014年度からポルトガル語学科非常勤講師としてお世話になっている、拝野寿美子と申します。1985年にこの学科に入学し、3年次に当時交流協定のあったブラジル・パラナ連邦大学に留学しました。卒業後は一般企業に就職しましたが、ブラジルに関わる仕事が猛烈にしくなり、ゼミの指導教員であった三田千代子先生に相談を重ね、1994年より上智大学ポルトガル・ブラジルセンター（現在はイベロアメリカ研究所と統合）の職員のお仕事を紹介していただきました。以来、20年以上上智大学の職員として勤務しています。

一方で、向学の志やみがたく(!?)、ブラジル留学時代の友人が日本に「デカセギ」として来ていたこともあり、働きながら学べる放送大学大学院修士課程に入学し、「在日ブラジル人（デカセギ）」を対象とした研究を開始しました。ブラジル人学校の研究に絞り込んでいったことから、教員養成大学である東京学芸大学博士課程に進学・修了して現在に至ります。

今年1月、ポルトガル語学科の授業として初めて担当する「アジアとポルトガル語圏」の授業で、履修生に「なぜポルトガル語学科を選んだのですか」というアンケートを実施しました。日本におよそ20万人のブラジル人が居住していることが、若者が興味を抱く言語に何らかの影響を及ぼしているかどうかを知り、授業の内容に反映させる目的がありました。その集計をしながら、私はひとりほくそ笑んだのでした。そこにはかつての自分がはっきりと映し出されていたからです。

私がこの学科に入学したのは30年も前のことになります。私は当時の「指定校推薦」組ですが、11月に実施されたこの推薦入試に合格できないと、もう2月の一般入試の準備は間に合わないという切羽つまった私的事情がありました。もともと外国語に興味のあった私は、以前から進路相談で高校の先生に「中国語かポルトガル語がやってみたい」と伝えていました。先生から上智の推薦入試を勧められ、あらためて「どの学科にする？」と尋ねられた私が最初にチェックしたのは、前年の「合格率」。そう、嬉しいことに、ポルトガル語が一番ひかかり易そうでした。迷わずこの学科を受験し、無事合格。入試の面接で、「あなた、本当は英語学科に行きたかったのでしょうか」とポルトガ

ル人の教授に聞かれ、動揺して泣き出したことも今では良き思い出です。マイナー言語でありながら日本の歴史に少なからぬ影響を与えているポルトガル語。上智の中では少し入りやすい。上智だから少しは英語もできるでしょう。まさに私にとってはベストマッチング。そして上智の先生方は全てお見通し。お陰さまで、充実した4年間を過ごすことができました。

イベロアメリカ研究所に勤務する傍ら、2008年から一般の方が平日夜間や土曜日に学ぶ本校コミュニティ・カレッジで、ポルトガル語初級を担当しています。コミュニティ・カレッジの受講生はポルトガル語を学ぶために、仕事や学校帰りに時間を作り、空腹を抱え、眠気とたたかって教室へと入って来ます。遠くは南アルプス市から、近くは四ツ谷三丁目から。ブラジル留学を控えた中学生から、日本史研究家の70代の女性（とびきり優秀でした！）、他大学の学生、ボサノバ歌手や弁理士、ブラジル研究を始めた大学教員など、職業も年齢も様々です。駐在を控え必要に迫られて学びに来る人も一定数おり、英語はもちろんのこと、スペイン語やイタリア語の知識がある人もいるので、教室には大学の授業とは異なる緊張感があります。ポルトガル語の教師として壇上にいても、私は皆さんの学びに潤滑油を注ぐ程度で、受講生同士で疑問点を話し合ったり、宿題の答えをこっそり教えあったり、試験の結果を見て励まし合ったりする学び合いの場が成立しています。とはいえ、皆が皆、大学生と同じような吸収力を持っているわけではありません。学ぶ意欲と習得率は比例しなくはないけれど、なかなか思い通りにいかないのも、社会人の事情です。

新入生の皆さんも、ポルトガル語を学ぶことに対して意欲のある人、今一つの人、色々いると思います。「ポルトガル語」よりは「上智大学」の魅力で入学を決めた人もいるでしょう。それで良いと思います。少なくとも私の入学した30年前から、あるいはそれ以前から連綿と続いてきた、それが「上智大学ポルトガル語学科」の宿命であり使命であることを、アンケートから再認識した次第です。でも、あえていわせていただきますが、ポルトガル語を学んで決して損はありません。ポルトガル語圏諸国には魅力的な文化や多彩な社会、豊かな資源や力強い人間力があります。だからこそ、大の大人が複雑な動詞の活用を覚えるために残業を切り上げ、夜の上智に通ってくるのです。私の経験上、30年続けていれば何らかの形で必ず「上智のポル語で良かったな」と思える日が来ます。大丈夫、30年はアツという間に過ぎますから。